

第 46 回日本手話学会大会

# 予稿集



2020年12月12日(土)

日本社会事業大学・文京キャンパス (東京都文京区)

主催：日本手話学会

協賛：日本社会事業大学「国際的視野を持った当事者ソーシャルワーカー養成」

Supported by  
 日本  
財団  
THE NIPPON  
FOUNDATION

## プログラム

2020年12月12日(土)

9:25 ~ 9:30 開会式

### 基調講演

9:30 ~ 10:30 **国際教育・教養教育と手話研究**  
COIL による日米協働教育 … 4  
斉藤 くるみ 氏 (日本社会事業大学)

### シンポジウム

10:40 ~ 11:40 **国際教育・教養教育と手話研究**  
ギャローデット = 社会事業大学協働授業の試み … 6  
日本社会事業大学教員学生有志  
Gallaudet University 教員学生有志

13:00 ~ 13:40 総会

### 手演・口頭発表

14:00 ~ 14:30 **全国手話検定試験で学ぶ基本単語に関する一考察**  
親密度と出現頻度の観点から … 8  
長谷川 由美 (近畿大学)

14:35 ~ 15:05 **Saussure 学説にみる手話観の再解釈**  
le langage des sourds-muets と sème にみる多数空間性と線条性 … 10  
末森 明夫 (産業技術総合研究所)

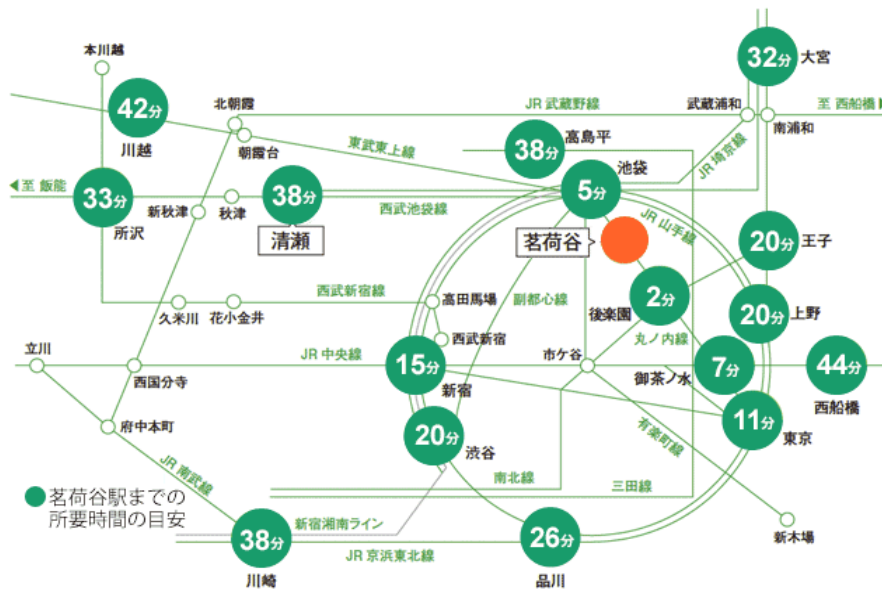
15:15 ~ 15:45 **日本手話言語における品詞の定義に関する一考察**  
ラネカーの認知文法的アプローチによる分類手法から … 12  
川口 聖 (国立民族学博物館)

15:50 ~ 16:20 **/山/-/木/問題から日本手話の CL の文法を考える**  
日本手話の CL の統語的特性への足がかり … 14  
森 壮也 (JETRO アジア経済研究所)

## 会場

日本社会事業大学・文京キャンパス（サテライトキャンパス）（401室）

〒112-0002 東京都文京区小石川 5-10-12



〈基調講演〉

# 国際教育・教養教育と手話研究

COILによる日米協働教育

齊藤くるみ

日本社会事業大学

手話研究の学際性を教養教育から国際教育へと活かしていった教育プログラムについて紹介する。これは日本手話話者である学生の言語権・学習権を守り、豊かな教養を基盤とし、国際的に活躍できるろう者（国内での多文化ソーシャルワーカー・教師等を含む）に育てるものである。この教育プログラムの中核を担うのが日本手話の存在である。学際領域としての手話研究は、多様な研究分野のつながり、すなわち学問のダイナミズムを実感させるのに理想的なテーマである。手話研究を活かした教養教育の実績と、それが国際教育へと昇華したプロセスを示す。

## 1. 背景

日本社会事業大学「聴覚障害者大学教育支援プロジェクト」は10年に渡って日本財団の助成を受け、①学内の聴覚障害学生の情報保障を行い、②関東の大学生・社会人にろう講師の「日本手話」による教養教育を提供し、③「日本手話」を入試科目に入れ、全国の日本手話話者を大学に呼び込み、④関東のろう・難聴の高校生に大学受験を促す手話と文字による学習塾を設置し、⑤文科省高認（高等学校卒業程度認定試験）オンライン対策講座を「日本手話」で全国に発信した。

その目標はろう者のアドボカシー・セルフアドボカシーを支える当事者専門職の養成であった。成果は約50名のろう者・難聴者の卒業生・修了生（社会福祉士・特別支援学校教員等）を輩出するのみならず、約50名ほどの関東周辺のろう学生を「手話による教養大学」に受け入れ、科目履修生（厳密には特別聴講生と呼ぶ）として単位互換制度を利用して（特に英語の単位）、それぞれの大学での卒業を助け、約60名のろう・難聴の高校生を大学受験に挑ませ、ほぼ全員大学に送ったことである。

その意義はろう・難聴の人たちが高等教育を受ける権利を守ること、ろう者の言語である「日本手話」の言語権を守ること、その重要性を社会に発信してきたことにあった。10年の間に日本は、障害者基本法を改正して手話を「言語」と明記し（2011）、障害者差別解消法を施行し（2013）、「障害者の権利条約」に批准した（2014）。これらの法律・条約で謳われたことは、本プロジェクトでは2009年から実現されていたことになる。本プロジェクトは本学会元会長森壮也氏と日本財団石井靖乃氏のおかげで立ち上がったものであり、またその推進に末森現会長の尽力もあった。つまり本学会との繋がりは最初から大きく、私が言語学、特に英語とその他の言語（マイノリティ言語を含む）との歴史的関係が専門であったこともあり、常に言語学的研究が中核にあったのである。

## 2. 手話による教養教育と「日本手話」研究

日本の大学教育の中で、「日本手話」を研究すること、「日本手話」について語ることは、ろう学生・聴学生を問わず、最も効果的な教養教育であるということは、リベラルアーツカレッジ出身の私の信念であった（齊藤2011）。

特にその学際性は、様々な教育プログラムに発展する可能性を秘めている (Saito, 2019)。その学際性は以下のようなものである。

- (1) 認知科学・脳科学における発見とその言語学・ろう教育への影響
- (2) 社会福祉学における障害の医学モデルから文化言語モデルへの転換
- (3) 社会言語学 (少数言語・危機言語研究) と政策
- (4) テクノロジーの発展への寄与と警鐘
- (5) ろう者および「日本手話」の歴史研究
- (6) 教育政策と政治・社会的背景
- (7) 法学における少数者・少数言語・障害の位置づけ
- (8) 倫理学 (生命倫理・優性思想) とろう者の運命

### 3. 教養教育と国際教育の関係

国際性とは何かと考えると、多様性の理解、多文化の中のコミュニケーション力、他者・多文化への柔軟性、そしてそれらをささえる教養であろう。

ろう者のアドボカシーを推進する専門職養成の中でも国際性はますます重要になっている。国外で活躍する人材、国外に目を向けられる人材、日本社会の中の多様性に対応できる人材は、ろう者・聴者を問わず、あるいは職業の分野を問わず重要になっている。国際性の点でろう者には大きなメリットがある。①言語的多様性への順応、②異文化・他言語への対処能力、③少数者を見落とさない感性などである。一方で国際性の障壁となるものに①英語力の壁 (音声偏重の英語教育)、②差別・偏見 (時に虐待) による自己肯定感の低さがある。国際教育への進化は上記メリットを社会に行かし、二つの障壁を超えるためのプロジェクトの進化である。実は30年大学教育に携わる中で、マジョリティに国際性を涵養することの難しさを感じてきた。国際教育を受け、マイノリティとして英国で暮らした私にとって、国際性・多様性を論じることが、聴者とよりも、ろう者とのほうが易しい

ことを実感してきた。10年間続けてきた「手話による教養大学」が、国際性をもつろう専門職に育てる教育に進化することは必然とも言える。

### 4. COIL による日米協働授業

COIL とは Collaborative Online International Learning (オンライン国際交流学習) の略である。インターネットを駆使することで時差のある国の学生同士が共に学び合う教授法である。現在ギャロデット大学と日本社会事業大学のろう学生 10名ずつが COIL 形式のろう者学と社会福祉・社会政策を結び付けて学び合っている。今春から COIL の発案者 Jon Rubin 氏の指導により準備を進めてきた。次のシンポジウムで日米を結んで実況しながら示す。

### 参考文献

- Guth, Sarah and Jon Rubin (2015), "How to Get Started with COIL", Alexandra Schultheis Moore and Sunka Simon eds., *Globally Networked Teaching in the Humanities, Theories and Practices*, Routledge, pp. 15-27.
- Rubin, Jon (2017), "Embedding Collaborative Online International Learning (Coil) at Higher Education Institutions---An evolutionary Overview with Exemplars" *International Higher Education*, Vol.2, 27-44.
- Rubin, Jon and Sarah Guth, "Collaborative Online International Learning --- An Emerging Format for Internationalizing Curricula," Alexandra Schultheis Moore and Sunka Simon eds., *Globally Networked Teaching in the Humanities, Theories and Practices*, Routledge, pp.15-27.
- 斉藤くるみ編著 (2017) 『手話による教養大学の挑戦～ろう者が教えろう者が学ぶ』(ミネルヴァ書房)
- 斉藤くるみ (2011) 「大学教育における『日本手話』の意義——リベラルアーツ教育・アイデンティティ教育からキャリア教育へ」、『大学教育学会誌』、63、96-103。
- 斉藤くるみ (2007) 『少数言語としての手話』東京大学出版会
- Saito, Kurumi, (2019) "Japanese Sign Language as Interdisciplinary Studies and Liberal Arts", Boston Conference Series: September 2019, (2019), 16-25.

〈シンポジウム〉

## 国際教育・教養教育と手話研究

ギャローデット＝社会事業大学協働授業の試み

日本社会事業大学教員学生有志

Gallaudet University 教員学生有志

本シンポジウムは、講演で述べた「日本手話」研究を基盤とする教養教育から国際教育への進化を、具体的に理解していただくために、日米をつなぎ、議論を進めていくものである。

### 1. 教養教育から国際教育への進化---ギャローデット大学との協働教育

国際社会の中で、ろう者が国際的視野をもった専門職に適性があることは先ほど述べたが、ろう学生はそのことになかなか気づかない。外国に行ってみて日本よりもコミュニケーションが取れたとか、居心地が良かったというろう学生が多い。まずは外国のろう者と接することが自らの中の国際性に気づくことにつながると考えた。

一方、英語を学ぶモチベーションを高め、さらには音のない英語によりコミュニケーションがとれる場で共に学ぶことは前述の国際性への障壁のひとつを越えることにつながる。またろう者であることに強い誇りをもつがゆえにギャローデット大学を選んだアメリカのろう学生と共に学ぶことは、もうひとつの障壁、自己肯定感の不足を克服することに貢献する。特に四年制大学には、ろうになり切れないろう学生がたくさん入学してくる。彼らにとってはろうを取り戻す”Deaf Gain”のチャンスである。

本プログラムはアメリカのろう者にとっても意義は大きい。世界中のろう者がアメリカ手話を学びギャローデット大学を目指す環境の中で、アメリカのろう者がろう世界の中の多様性を知ることにはむしろ難しい。「日本手話」と日本のろう文化を学ぶことは多様性を知るチャンスと

なる。アメリカのろう者が、日本やアジアに興味をもつことを期待している。

### 2. COIL のしくみ

日米二大学の教授チームは、COIL の発案者であるニューヨーク州立大学 COIL センターの所長 **Jon Rubin** 氏をゲストに迎えオンライン会議を重ねた。

本プロジェクトを計画した2019年には、世界が新型コロナのパンデミックに襲われることなど夢にも思わなかったが、このパンデミックにより遠隔教育（リモート）が常識となり、オンライン教育へのアレルギーがなくなったことは本プロジェクト推進の一助となった。

旧プログラムの頃から、全国を対象を広げられればと思ったが、手話による教育はリモートでは無理なのだと反対する人も多かった。（これは音声言語でも同様である。「同様」とは、リモートでは教育は無理だという見解があること、そしてその真偽、両方についてである。）

新型コロナにより、COIL 開始時には、期せずして、大学生が皆オンライン教育、それも双方型とオンデマンド型の両方を経験していたことは、導入をスムーズにした。

#### (1) コンテンツ

コンテンツ（教材）としては、ろう者学を構成する言語や歴史についての研究者とソーシャ

ルワーク分野の研究者・専門職が動画を作成した。学生たちは Google Classroom にアップされるそれらの動画を順次受講し、課題に取り組む。このコンテンツはすべて日米手話、または日英語のバイリンガル教材である。

## (2) 双方向の授業

Zoom により一堂に会する授業は、2セッション計 180 分である。ここではアメリカ手話⇔日本手話⇔日本語の通訳 4 名も Zoom に入っている。全員の前で自己紹介をしたり、リアルタイムで全員が議論するチャンスである。日本の早朝、アメリカの夜間になるため頻繁には開催できないという問題はあ

## (3) SNS を使った協働作業

COIL の発案者 Jon Rubin 氏によると、COIL の最も重要な部分は学生主体のアクティブラーニングである。学生を日米 2 名ずつのグループに分け、あらゆるソーシャルメディアの中から何を使うか学生たちで決める。そして常時、動画を送り合ったり、文字を使ったりしながら、質問や意見を投げかけ合い、課題を仕上げ Google Classroom に動画や文字で提出する。

## 3. コミュニケーション

基本的にはすべての言語を同等とみなし、講義やテキストには翻訳動画や字幕を付け、バイリンガル（日米手話または日英語）で作成した。学生同士がどうコミュニケーションをとるかは、言語学的に興味深いところであるが、CL を多用し、双方自分の手話と文字（英語）を使っているようである。どうしても英語が共通語となりがちなことは、聴者の世界と同様であり、問題でもあるが、英語が現状で国際コミュニケーションの武器となっていることは否めず、現状で国際性の一部であることを否定してしまつたら、世界の英語偏重に異議を唱える（英語で）ことすらできないジレンマがある。さらに手話の世界でも同じことが起きている。多くの日本の学生がアメリカ手話を履修しているためアメリカ手話がかなり使われてしまう。コミュニケ

ーションがとれることと、言語の等価の保証に矛盾が起きることは、日本手話が日本語対応手話に淘汰されそうになる問題と本質的に同じである。（因みに日本語対応手話は手指日本語であり手話ではないことは日本学術会議の提言にも明記されている。）Jon Rubin 氏は、聴者の学生の COIL しか経験がないとのことであったが、お互いにお互いの言語を尊重して、作業を進めることは可能だと言っていた。とはいえ、日本のいくつかの大学の COIL 導入例はすべて「英語」修得のためのものになっている。学生も一種の英語留学と考えていると思われる。

本プログラムのコミュニケーションのあり方は言語接触の実験でもあり、今後の言語学的研究に委ねたい。

注) 現在進行している COIL について紹介するため、参加した教員・学生とオンライン上につなが、また Google Classroom（担当教員・履修学生しか見られない）や授業のコンテンツ（日本語字幕つきの黒人 ASL の教材等）をスクリーンでお見せします。

## 参考文献

日本学術会議提言「音声言語及び手話言語の多様性の保存・活用とそのための環境整備」

<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-23-t247-9.pdf>

ドキュメンタリー

COIL Consulting

<http://www.coilconsult.com/welcome.html>

History through Deaf Eyes (2007), Gallaudet University

<https://www.youtube.com/watch?v=JeAG8tZyf4&t=1792s>

Signing Black in America

<https://www.talkingblackinamerica.org/signing-black-in-america/>

# 全国手話検定試験で学ぶ基本単語に関する一考察

## 親密度と出現頻度の観点から

長谷川 由美

近畿大学生物理工学部

語学関連の検定試験では、その試験で使われる語彙を明確にしていないことが多いが、全国手話検定試験（以下、手話検定）は、各級の基本単語一覧（以下、単語一覧）をホームページや試験対策の標準テキストで公表している検定試験のひとつである。試験に単語の問題もあるため、多くの受験生が、この単語一覧を見ながら試験対策として単語学習しているはずだ。本調査では、公開されている5級から準1級までの単語一覧にある単語を出現頻度と親密度の2点から分析を行い、各級の基本単語の傾向や特徴を調べる。

キーワード：全国手話検定試験、基本単語、親密度、出現頻度

### 1. はじめに

“Without grammar very little can be conveyed, without vocabulary nothing can be conveyed” (Wilkins 1972; 111) は、言語学習における語彙の重要性を示した有名な言葉である。その重要性を裏付けるかのように、世界中で様々な言語の語彙研究が行われている。また、日本の書店では、入試や各種検定対策用の多種多様な単語本が販売されており、学習者の語彙力アップに対する関心の高さがうかがえる。

手話に関しては、手話学習者数が増えてきこともあり、学習者向けの単語に関する研究は数多くはないものの、いくつか見られる。鎌田ら (1999; 65) は、手話表現には言葉の様態や特徴が音声語とは異なるものがあるが、音声語と同じように語彙の学習を学習要素の1つとして挙げており、このことから、学習者目線の手話単語の研究がさらに必要になるのではないかと考える。

### 2. 調査目的

本調査の目的は手話検定の単語一覧に掲載されている単語を以下の2つの方法で分析し、その特徴を明らかにすることである。

- ①各級の基本単語の出現頻度を基準にした単語レベルの傾向
- ②各級の基本単語の親密度を基準にした単語レベルの傾向

### 3. 調査対象

調査対象は手話検定のホームページからもダウンロードできる5級から準1級までの単語一

覧に記載されている単語である。対象とする単語を以下のように整理した。

- ・5級の序数詞、指文字、濁音、半濁音、撥音、拗音、そして4級の都道府県名と序数詞は対象外とした。
- ・1つの手話単語につき1つの日本語訳が付けられているが、2級の「出世、昇進」には2つの訳が付けられている。その単語のみを2単語として数えた。
- ・異なる手話単語AとBで同じ日本語訳が付けられている場合は、単語は2単語として数えた。
- ・「実現[する]」のように「名詞[する]」で記載されている語は、名詞を使って調べた。
- ・単語一覧にある「ありがとう」などの簡単な文も単語とみなした。

上記の条件で整理した結果、5級443語、4級442語、3級508語、2級737語、準1級678語を調査対象とした。

### 4. 調査方法

日本語学習者および日本語研究者が利用するサイト「リーディング・チュウ太」のレベルチェッカーを使い、単語一覧にある単語の親密度と出現頻度情報に基づいた分類を試みた。

親密度チェッカーは『日本語の語彙特性』（NTTコミュニケーション科学基礎研究所）の単語親密度を基準にして単語のレベルを判定するツール（川村 2009: 53）である。親密度が高いものから level A（親密度 6.3 以上）、level B（6.0 以上 6.3 未満）、level C（5.5 以上 6.0 未満）、level D（5.0 以上 5.5 未満）の4レベルと、その他（5.0 未満）、助詞・助動詞・接続詞、記号類の7つに



分類できる。親密度が高いほど、より基本的な語であると判断される。

頻度チェッカーは『朝日新聞』記事データ(1985年-1998年)における単語出現頻度をもとに、単語のレベルを判定するツール(川村, 2009:55)である。出現頻度順の上位1万2000語を2000ごとに区切って、高頻度順に level 6 から level 1、その他、そして、助詞・助動詞・接続詞、記号類の9つに分類できる。

## 5. 調査結果

### 5.1 親密度

親密度チェッカーによる各級の基本単語の分析結果は以下の通りである(表1)。それぞれの級の中心となっている親密度のレベルは、5級は level A、4級と3級は level B、2級と準1級は level C であった(表1 網掛け部分)。

### 5.2 出現頻度

頻度チェッカーによる各級の基本単語の分析結果は以下の通りである(表2)。level 6 から level 1の間では、5、3、2、準1級で level 6 の単語が一番多かった(表2 網掛け部分)。

## 6. 考察と今後の課題

親密度に関しては、下位級になるにつれて、親密度が高い基本的な単語が多くなる傾向、上位級になるにつれて「その他」に含まれる単語が増える傾向が見られた。このことから、下位級から順に受験する場合は、より基本的な語彙から学べるようになっていていると考えられる。

出現頻度に関して、level を6から level 1を見ると、他の級とは少し異なる傾向がみられる4

級を除いては、1番頻度が高い level 6 の単語が最も多く含まれている。これは、検定試験では手話でのコミュニケーションを重視しているのに対して、出現頻度チェッカーが新聞記事データを元に作られていることに起因していると考えられる。また、どの級においても「その他」のレベルに分類される単語が多い。これは、各級において、障がい者関連の福祉や医療に関する単語、「なーんだ」のような新聞ではあまり使わないような表現などが含まれていることが一因であると思われる。

これらのことから、今後の課題として、「出現頻度において他の級とは異なる傾向が見られた4級の単語の分析」と「親密度および出現頻度で『その他』に含まれる単語の詳細な分析」を行うことによって、単語一覧の特徴がより鮮明に見えてくるのではないかと考えられる。

## 謝辞

本研究は、近畿大学生物理工学部生物理工学部戦略的研究の助成金交付により研究を遂行することができました。感謝申し上げます。

## 参考文献

- Wilkins, D.A., 1972, *Linguistics in Language Teaching*, London, The MIT Press, 111.
- 鎌田一雄・西堀義仁・西本哲也, 1999, 聴者のための手話学習支援システムに関する一考察, 映像情報メディア学会技術報告(23.62), 61-66
- 川村よし子, 2009, 『チュウ太の虎の巻』, くろしお出版, 52-57.
- 全国手話検定試験 <https://kentei.com-sagano.com/> (最終閲覧日: 2020年11月9日)
- リーディング・チュウ太 <http://language.tiu.ac.jp/> (最終閲覧日: 2020年11月9日)

表1 各級の基本単語の親密度 (%=小数1位を四捨五入)

level / 級	A	B	C	D	その他
5	214 48%	135 30%	50 11%	16 3%	26 6%
4	140 32%	154 35%	101 23%	13 3%	31 7%
3	143 28%	172 34%	120 24%	24 5%	48 9%
2	91 12%	258 27%	248 34%	53 7%	82 11%
準1	61 9%	184 27%	254 37%	73 11%	103 15%

level / 級	助詞 助動詞 接続詞	記号類
5	4, 1%	0, 0
4	1, 0%	2, 0%
3	0, 0	1, 0%
2	1, 0%	4, 1%
準1	0, 0	3, 0%

表2 各級の基本単語の頻度 (%=小数1位を四捨五入)

level / 級	6	5	4	3	2	1
5	134 30%	69 16%	62 14%	42 9%	43 10%	30 7%
4	60 14%	76 17%	38 9%	39 9%	49 11%	24 6%
3	90 18%	72 14%	50 10%	52 10%	27 5%	21 4%
2	151 20%	90 12%	81 11%	60 8%	48 7%	45 6%
準1	136 20%	113 17%	81 12%	58 9%	58 9%	29 4%

level / 級	その他	助詞 助動詞 接続詞	記号類
5	59, 13%	4, 1%	0, 0
4	153, 35%	1, 0%	2, 0%
3	195, 38%	0, 0	1, 0%
2	257, 35%	1, 0%	4, 1%
準1	200, 28%	0, 0	3, 0%

# Saussure 学説にみる手話観の再解釈

## le langage des sourds-muets と sème にみる多数空間性と線条性

末森 明夫

国立研究開発法人産業技術総合研究所

### 1. 『講義』にみる聾啞文脈

Saussure の高弟 Bally と Sechehayé は、Saussure の講義に出席した学生たちの聴講ノート(=『聴講ノート』)を基に『一般言語学講義』(=『講義』)(Bally & Sechehayé 1916 = 1971)を編著した。その後『講義』は近代言語学や現代思想における礎石として定位されることになる。しかし Godel(1957)や Engler(1967)は『聴講ノート』と『講義』の校合をおこない、『講義』が『講義ノート』に忠実に編集されているわけではないことを明らかにした。

さらに Bouquet et al.(2002)は 1996 年に発見された Saussure の自筆草稿の一部(=『自筆草稿』)を翻刻公開し、『自筆草稿』と『講義』の間に看過しがたい齟齬がみられることを明らかにした。それに伴い、昨今の Saussure 学説には『講義』を無謬化することなく、『聴講ノート』や『自筆草稿』に回帰し、Saussure 自身が描いていた理論の再解釈および再構築をはかる潮流が生じている。

なお『講義』には「聾啞 *sourds-muets*」が延べ語数 2 語みられる。昨今の Saussure 学説において「聾啞の言語 *le langage des sourds-muets*」はどのように関連布置され、手話言語学史にどのように定位され得るのであろうか。

『講義』聾啞文脈 I : 言語は観念を表はす記号の体系である。従つて書 *l'écriture*、聾啞の指語法 *l'alphabet des sourds-muets*、象徴的儀式、作法、軍用信号、等と比較すべきものである。ただ、言語は是等の体系の中で最も重要なものなのである。(小林 1928:34)

『講義』聾啞文脈 II : 記号が[時]に於て連続的でもあり[時]に於て変遷的である事は、一般記号学の一原理である。書体系 *écriture*、聾啞の言語 *le langage des sourds-muets*、等に於てもそれは証明し得る。(小林 1928:155)

近代手話言語学は Stokoe(1960)にみる言説を手話言語学史における嚆矢とし、20 世紀後期には大きな発展を遂げた。しかし「百科全書派や Wundt(1832-1920)にみる聾啞文脈と近代手話言語学の系譜」や「昨今の Saussure 学説と近代手話言語学の関連性」については十分な考察がはかられているとはいいがたい面が残る。本稿では『講義』『聴講ノート』『自筆草稿』にみる聾啞文脈の批判的考証を通して、Saussure 学説にみる手話観の再解釈をはかり、手話言語学史に資することを試みる。

### 2. 『聴講ノート』にみる聾啞文脈

『聴講ノート』には『講義』聾啞文脈 I との関連性がみられる記述が 10 箇所あり、そのうち聾啞語彙がみられるものは 7 箇所にのぼる。しかし、そのうち *l'alphabet des*

*sourds-muets* があるのは 1 箇所のみであり、その他の聴講ノートは *les système de sourds-mutes*、*la langue des sourds-mutes*、*le langage par signes sourds-muets* のようなさまざまな聾啞語彙が用いられている。すなわち Saussure の講義で *l'alphabet des sourds-muets* という用語が用いられたかどうかは判断できないだけでなく、学生たちも *système*、*signe*、*langage*、*langue* のような語彙にみる Saussure の意図や逡巡を正確に理解していたわけではないことが窺われる。

また『聴講ノート』には『講義』聾啞文脈 II に関連する記述が 2 箇所あり、2 箇所とも *le langage des sourds-muets* を用いている。この文脈から Saussure が *écriture* にみる通時の変化を *le langage des sourds-muet* にみていたことが窺われる。ただ百科全書派言説(「自然的秩序手真似」から「制度的秩序手真似」への変化)の影響の有無については後考を俟つことにしたい。

また『聴講ノート』には『講義』には関連する箇所がみられないものの、聾啞語彙を含む記述が 4 箇所みられる。

話すための言語 *langue* の器官を使う必要があるのでしょうか。聾啞者... *Et cependant les sourds-muets*。ですから、言語 *langue* の中には多くの側面があって、しばしば矛盾します。(相原・秋津 2006:13)

このような聾啞文脈からは通時言語学と共時言語学を峻別し、共時言語学の中に *langue* の言語学と *parole* の言語学それぞれを確立しようとする中、*parole* にみる線条性の問題があるにも拘わらず *le langage des sourds-muets* を排除しきれない Saussure の苦悩の一端が窺われる。

### 3. 『自筆草稿』にみる聾啞文脈

『聴講ノート』には言語 *langue* にみる聴覚映像(=能記 *sinifiant*)と単一空間性の連関性を強調することにより、通時言語学と共時言語学の分岐をはかるようとする行が散見される。しかし『自筆草稿』には聾啞語彙は認められないものの、『講義』にみる二大原理(恣意性と線条性)のうち、聴覚記号の単一空間性 *unispatialité*(=線条性)に加えて、視覚記号の多数空間性 *multispatialité* や聴覚記号と視覚記号を包摂し得る *sème* に関する考察がみられる。

『自筆草稿』(3310.11)項目 *sème* という新しい述語が *signe* という述語に対してもつ差異、[あるいは利点]。1 *signe*(=記号)は非音声的なものでも構わない。*sème* も同様である。しかし *signe* は直接の動作、すなわち体系と取り決めの外でも記号たり得る。(中略) *sème* とは取り決めに基づいた体系的(音声的であろうと非音声的であろうと) *langue* を構成する *signe* の特性が認められ

るような相異なる諸々の特性を分かちもっている記号である。最初から注目すべき特性とは、時間における連続性と変化、心理化(再統合可能性と動機づけ)である。(松澤 2013: 165)

『講義』聾啞文脈Ⅱは Saussure が言語学を包摂した記号学の構築を目指していたことを示唆している。ただ『聴講ノート』や『自筆草稿』からは聴覚記号と文字を始めとする視覚記号を峻別する作業や、聴覚記号と視覚記号を包摂する *sème* を構築する作業がはらむ矛盾に対する Saussure の苦悩の一端が窺われる。また『自筆草稿』にみる *sème* 関連記述からは「聴覚記号と視覚記号を包摂し、身振りや軍用信号とは異なる言語概念の模索」が窺われる。このような文脈は『講義』聾啞文脈Ⅱからは窺い知ることはできない。

とりわけ昨今の Saussure 学説は、Saussure が「*la langue* と *parole* の二重性こそが言語学の本質である」と考えていたことを明らかにしている。この見解に則ったばあい、手話に単一空間性と多数空間性の二重性をみることはできるのか、*écriture* と *sème* や手話にみる多数空間性はどのように異なるのかといった作業仮説に基づく論点整理が望まれる。

#### 4. Saussure 学説にみる聾啞文脈の再解釈

Saussure は 19 世紀に言語学の主流を占めていた「文字に依拠する通時言語学」とは別に「音声に基づく共時言語学」の確立をはかったと言われている。

『聴講ノート』聴覚記号と視覚記号を一緒くたにしないことが重要です。(相原・秋津 2006: 47)

さらに『講義』は「言語学の対象は言語 *langue* である」という文で締め括られている。しかし、この文は Bally と Sechehayé による加筆であることが判明している。一方松澤 (2010) は「Saussure は『言語学の対象は言語 *langage* である』と考えていた」という再解釈を提唱している。

Saussure は『自筆草稿』ではしばしば「言語の科学 *la science du langage*」という表現を用いている。このことは Saussure が言語学の対象を *langage* と考えていたのではないかという解釈に誘わずにはおかない。この *langage*こそ言語現象全般を指す総称であり、したがって「言語」とむしろ訳されるべきであり、*la langue* とは *parole* との対比においては、社会的性格をもった言語規範、言語体系あるいは共通語の意味で用いられている… (松澤 2010: 21)

松澤 (2010) の再解釈を援用するばあい、『講義』や『聴講ノート』にみる *le langage des sourds-muets* はどのように再解釈され得るのであろうか。『聴講ノート』や『自筆草稿』からは Saussure 自身が描いていた言語学・記号論の射程が視覚記号の特性を持つ言語的記号としての *le langage des sourds-muets* を捉えていた可能性が窺われる。しかし『講義』の編著により Saussure 自身が模索していた手話観の構築は Saussure 学説の片隅に追いやられ、雌伏して 20 世紀後期を待たざるを得なかったと再解釈をはかることもできる。

実際 Benveniste は *parole* を包摂する言表 *énoncé* や発話者 *énonciateur* という概念を提唱し、Culioli は言語学にみる *le langage* と *la langue* を再定義し、諸概念にみる相互性の明確化をはかっている(伊藤 2015)。『聴講ノート』や『自筆草稿』にみる聾啞文脈や *sème* 関連文脈を、単一空間性と多数空間性の問題、*la langue* と *parole* の

二重性の問題や *le langage* にみる主体性の問題に投影し、Saussure 学説にみる聾啞文脈および手話観の再解釈をはかっていくことが望まれる。

#### 5. Saussure 学説にみる聾啞文脈の日本的受容

『講義』の邦訳本は『言語原論』などが出ているものの(小林 1928 ほか)、Saussure 学説にみる聾啞文脈の翻訳の経緯は等閑に附されている。小林 (1928) は *l'alphabet des sourds-muets* に「聾啞の視話法」をあてているのに対し、小林 (1942) と小林 (1972) は「視話法」をあてている。同様に小林 (1928) は *le langage des sourds-muets* に「聾啞の言語」をあてているのに対し、小林 (1942) と小林 (1972) は「視話法」をあてている。なお小林 (1928) は「言語活動 *langage*」「言語 *langue*」「言 *parole*」という邦訳語を体系的に用いているにも拘わらず、*le langage des sourds-muets* には「聾啞の言語」をあてている。このような経緯は Wundt にみる聾啞文脈の歪曲を経た日本の受容を彷彿させるものがある(田中 2017)。

一方、松澤 (2010: 21) の「言語 *le langage*」と「言語規範 *la langue*」にみる再解釈を先取りしたかのような聾啞文脈は 20 世紀初葉の淀野 (1913) や松永 (1935) にみることができる。

手話は手話として生活する。即ち、手話が書言語に移植されるものでなければ、手話の形式の価値云々は既に問題ではなくなったことが明らかに理解される筈である。手話に依って聾啞者の世界意識が想像せられる。書言語に依って聾啞者の世界意識が書言語の文体論的特質の形成に依ってユニバーサルに達せられる。(松永 1935: 366)

20 世紀初葉の日本にみる人文社会領域と聾啞教育界の相互作用に基づく手話観の構築の一端についても、て後考を俟ちたい。

#### 参考文献

- Bally, C., Sechehayé, A. & Riedlinger, A. (eds.) 1916 = 1971 *Cours de linguistique générale*. Paris: Payot. (=1928 小林英夫訳『言語学原論』岡書院。=1942 小林英夫訳『言語学原論改訂新版』岩波書店。=1972 小林英夫訳『一般言語学講義 改版』岩波書店。=2016 町田健訳『新訳一般言語学講義』研究社。)
- Bouquet, S., Engler, R. & Weil, A. (eds.) 2002 *Écrits de linguistique générale*. Paris: Gallimard. (=2013 松澤和宏訳『自筆草稿 言語の科学』岩波書店。)
- Engler, R. (ed.) 1967 *Cours de linguistique générale*. Otto Harrassowitz Verlag.
- Godel, R. (ed.) 1957 *Les sources manuscrites du "Cours de linguistique générale" de F. de Saussure*. Université de Genève.
- Komatsu, E. & Wolf, G. (eds.) 1997 *Deuxième Cours de Linguistique Générale (1908-1909): D'après Les Cahiers d'Albert Riedlinger et Charles Patois*. Pergamon. (=2006 小松英輔編・相原奈津江訳・秋津伶訳『一般言語学』第二回講義: リードランジェ/パトワによる講義記録』エディット・バルク。)
- 伊藤達也 2015 「語彙意味論に適する「相互依存的」構成性について」『名古屋外国語大学外国語学部紀要』48: 135-143.
- 松永端 1935 「如何にして聾啞者に於いては手話と書言語が可能であるか」『聾啞年鑑』日本聾啞協会: 361-366.
- Stokoe, William C. 1960 *Sign Language Structure*. *Studies in Linguistics* 8.
- 田中さをり 2017 「音象徴と図像性: 日本におけるヴントの手話学説曲解の歴史」『現代生命哲学研究』6: 1-19.
- 淀野耀淳 1913 「視覚の知識学的研究(完)」『哲学雑誌』28: 149-166.

# 日本手話言語における品詞の定義に関する一考察

## ラネカーの認知文法的アプローチによる分類手法から

川口 聖

国立民族学博物館 外来研究員

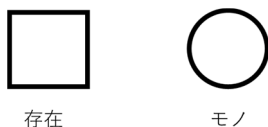
日本手話言語は書き言葉のない話し言葉である。そのため、手話単語の日本語表記による辞名、あるいはラベル、注解 (Gloss) を参考に品詞分類して、日本手話言語の文法を分析する研究が目立っている。実際に、手話単語の意味と、その単語に対応する音声言語による辞名の意味が完全一致しないため、文法分析の誤差が大きくなる可能性が出ている。そこで、手話単語の図像性を着目して、ラネカーの認知文法的アプローチによる分類手法を使って、手話単語の構素 (手の形、手の向き、手の位置、手の動き) に合わせて品詞分類するという、日本手話言語における品詞の定義を提案する。

キーワード：日本手話言語 図像性 品詞 ラネカー 認知文法

### 1. ラネカーの認知文法

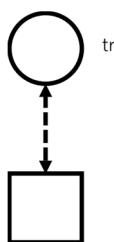
#### 1.1 名詞

Langacker (2008) によれば、「想像されたり指示されたりする可能性があるあらゆる概念」(p.126) を存在と定義づけ、「名詞は、モノ(thing) をプロファイルする表現として抽象的に定義される」(Langacker, 2008, p.126) と言及している。スキーマの図式としては、存在は四角形、モノは円か楕円で表される。



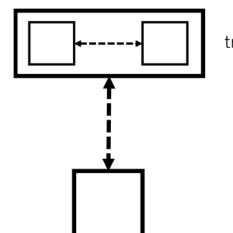
#### 1.2 形容詞

「伝統的に、形容詞は名詞を修飾すると言われる」(Langacker, 2008, p.147) 通り、スキーマの図式においては、焦点参与者としてのトラジェクター (tr) はモノであり、際立たない存在との関係を示している。



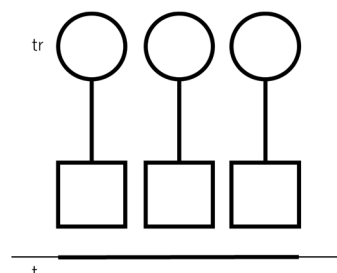
#### 1.3 副詞

「副詞のトラジェクターは関係である」(Langacker, 2008, p.147) 通り、スキーマの図式においては、2つの存在の関係を際立ち、際立たない存在との関係を示している。



#### 1.4 動詞

Langacker (2008) は、モノや存在などのさまざまな関係に、プロセス関係と非プロセス関係の区別を言及している。「プロセスは時間軸上に展開する」(Langacker, 2008, p.126) とおり、スキーマの図式においては、名詞と形容詞と副詞は非プロセス関係にあり、動詞はプロセス関係のなかで、トラジェクターとしてのモノと時間軸 (t) を際立てることを示している。



## 2. 日本手話言語の品詞分類

### 2.1 日本手話言語の品詞分類表

ラネカーの認知文法的アプローチによる分類手法を使って、手話言語の図像性と手話単語の構素（手の形、手の向き、手の位置、手の動き）に照らし合わせながら品詞分類すると、次の表を示す。手話単語の構素によって、対象や付加情報や変化や過程のそれぞれが見えるか否かを○や×として付ける。

	対象	付加情報	変化	過程
名詞	○	×	×	×
形容詞	○	○	×	×
副詞	○	○	○	×
動詞	○	○	○	○

### 2.2 日本手話言語の名詞

手話単語の構素によって、視覚的に白黒の世界で対象の輪郭が見えれば、その手話単語は名詞であると分類する。例えば、丸い物を形作るように手話表現して「ボール」と示せれば、名詞となる。手の位置をずらして、「大きいボール」や「小さいボール」などのように示せれば、名詞となる。

### 2.3 日本手話言語の形容詞

あたかも視覚的に白黒の世界に色付けたかのように、その対象に色付ける付加情報が見える手話表現になっていれば、その手話単語は形容詞であると分類する。例えば、「ボール」の手話単語の前後に、色や状態などの付加情報がわかる手話表現を示せれば、形容詞となる。

### 2.4 日本手話言語の副詞

ある対象に2つ以上の存在があって、それらの関係があると際立つように、変化が見える手話表現になっていれば、その手話単語は副詞であると分類する。例えば、ボールを投げた後、飛ぶボールの軌跡がわかる手話表現を示せれば、「ストレートするボール」とか「カーブするボール」などのようにわかる副詞となる。

### 2.5 日本手話言語の動詞

ある対象にプロセス関係が見える複数の存在があって、その対象を動かす、何らかのパワーや

エネルギーなどの力関係が見える手話表現になっていれば、その手話単語は動詞であると分類する。例えば、ボールを投げる仕草がわかる手話表現を示せれば、「投げる」とわかる動詞となる。

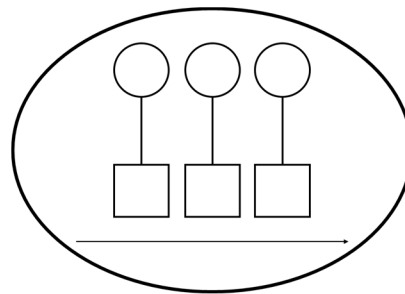
## 3. まとめ

図像性の高い手話単語には、わざわざ日本語表記の辞名に変換しなくても、手話単語の構素を参照するだけで品詞分類できると示した。例えば、「～から～まで」の期間を表す手話単語は、日本語表記の辞名に合わせて助詞と分類するのではなく、「始まる」や「終わる」と認知する手話表現として、動詞か副詞であると分類するのである。

Langacker (2008) によれば、次のスキーマの図式は名詞であると分類している。要するに、動詞の名詞化を示している (p.151)。図像性の高い手話単語には、動詞と分類しても、構文によって名詞と分類できるのである。

こうして、日本手話言語の文法分析に、音声言語中心の研究手法では、誤差が大きすぎるため、結果的に、日本手話言語をネイティブ的に使えない研究者には、手話言語学研究調査活動の限界があると示した。

今後の課題としては、ラネカーの認知文法について更に知見を深めながら、タルミやレイコフなどの論文を参照しながら、メタファーなどの研究につなげていきたいと思っている。



## 参考文献

Langacker R. W. (2008). *Cognitive Grammar A Basic Introduction* New York: Oxford University Press, Inc. (ロナルド・W・ラネカー 山梨正明 (監訳) (2011) . 認知文法論序説 研究社)

# /山/-/木/ 問題から日本手話のCLの文法を考える

## 日本手話のCLの統語的特性への足がかり

森 壮也

JETRO アジア経済研究所 (日本社会事業大学・早稲田大学・関西学院大学) E-mail: soya\_mori@ide.go.jp

従来、CLについての手話の研究上の議論は主として分類に向けられており、それがどのように用いられているのかということについては、あまり正面から議論がなされてこなかった。こうした中、ある手話講師からの発言を契機として、手話の語もCLは自由に用いられるわけではなく、指差し等についていくつかの制約が課されることが改めて認識された。本報告では日本手話の/山/を取り上げ、その位置関係やそこへの指差しなどがどのように起きているのかについて今後の研究への足がかりをつかむ。

キーワード：日本手話 CL 語順 非手指動作 指差し

### 1. 考察の背景

図1は、2020/8/5にツイッター上で見かけたものである。手話が聴覚ではなく、視覚に多く依存する言語であることはその通りであるが、日本手話の「存在」の表し方については、必ずしもこの通りではないように思われた。

このツイートをきっかけに「山の上に一本の木がある」という意味内容を持つ日本手話の文が、日本手話では通常、どのように表されているのかを改めて注意深く観察してみた。最もシンプルなものでも日本手話では、/山/ PT<sub>3</sub>(山の頂上)/木/のような文になるのではないかと。しかし、それは何を意味するのかが本報告の背景である。

手話は視覚言語。すなわち、手話で現されたものは既に目に現れている。存在を表す「ある・いる」は必ず手話表現する必要があるのか、悩むところ。  
例えば「山の上に1本の木がある」は、「山/ (表現した山の上辺りに) 木」だけで済ませることもできる。「上」のいつ位置詞すら省ける。なにはともあれ👉  
午前9:45 · 2020年8月5日 · Twitter for iPhone

図1 きっかけとなったツイート

### 2. 日本手話における/山/と問題意識

日本手話における山を意味する手話の語、/山/は、固定語彙と言って良い。多くの辞書にも図2(財団法人全日本聾唖連盟『改訂版わたしたちの手話(I)』、1983, p.98)のようなイラストが掲載されているであろう。このイラストでは、動きがかなり単純化されており、シンプルな半弧となっている。掌の向きや手型は、このイラストからだけではうかがいがい知れないが、この語は広く使われていると言えよう。



図2 /山/の手話

恐らく多くの手話指導の現場でもこの語は、例えば「山の形を表しています」といったような説明と共に表示されているのではないかとと思われる。

手話講師も手話学習者も覚えやすい手話として、この語を認識し、日常的にも用いていよう。先のツイッター(図1)は、そうした状況を出てきたものとも言える。その透明性(写像性)が高いことから、この語が一見、個人によって様々な形を示すジェスチャーである、あるいはそれゆえ自由にこの語を用いることができると指導の現場でも思われている可能性がある。しかしながら、図1のツイートを契機に改めてこの手話を見てみると、少なくとも関東のろう者の範囲では、この手話の用いられ方は、そう自由なわけではないことが見えてきた。そこで、この「山の上に木がある」と日本語で表される内容を日本手話で表す時の問題を、「/山/-/木/問題」と名付け、言語学的な考察を試みた。

### 3. 言語学的検討

#### 3.1 理論的検討その1: 山のさまざまな場所

「/山/-/木/問題」では「山の上に」という位置関係としては、山の頂上あるいはその周辺があげられていたが、それ以外の場所ではどうなのだろうというのが最初の検討課題である。よく言われるそれ以外の場所として、山腹(山頂と麓との間の部分)、山麓(山裾)が挙げられよう。

/山/という日本手話の語がもし山の形を表し

たもので、「木が～にある」ということを言いたいのであれば、先のツイートが正しいのなら、それは同時に手話語彙の横の弧部分辺りで/木/と表す、あるいは/山/の表出後、その前の麓にあたりそうな部分で/木/と表すことで、該当する意味をそれぞれ表すことができるはずである。

しかしながら関東地区のネイティブろう者への聞き取りでは、そのような手話句あるいは手話文では意図していた意味にはならず、奇異な感じを受けるとのことであった。すなわち、

- (1)  
利き手： /山/ PT<sub>3</sub> (山裾位置)  
非利き手：

は許容されないが、

- (2)  
利き手： /山/ PT<sub>3</sub> (山裾位置)  
非利き手： 山 CL (山裾位置)-----

なら許容されるという。また

- (3)  
/山/ CL (山裾位置) (山稜の変化する様子) PT<sub>3</sub>

なら PT<sub>3</sub> が指し示す位置の句が許容される。

つまり、文や会話の初出で/山/という語の軌跡があるように見えても該当部分をいきなり指差すのでは、奇異であるが、非利き手が添えられることにより、通常の手話の語ではなく、CL化する、あるいは語の後に CL が明示的に挿入されることで、この指差しが許容されると分かる。

### 3.2 理論的検討その2 (先行研究)

一方、上記の3.1の検討で明らかになったこととして、位置関係を示す際には、通常の手話の語ではなく、CL (類別辞) であることを示すマーカが挿入される必要があることが分かった。また、こうした位置関係を示すためには、語彙化した語とそうではない CL との2つが必要であることになる。そこで改めてこうした語彙と CL との関係について考察してみた。たとえば、市田 (手話文法研究室) は、CL と通常の手話の語について次のように述べている。

「CL 手形を使用した構文。(中略) 手話の語彙レベルおよび空間表現において図像性を利用する際に用いられる。フリージング (凍結) することによってフローズン語彙となる。」(同様の記述は、McDonald 1982, Shepard-Keg! 1985, Brennan 1990, Schick 1990, Johnston and Schembri 1999, Schembri 2003 等多数)

こうした記述を除くと、CL についての先行研究はその分類に関わるものが多い。CL がプロダクティブ・フォームであり、固定語彙がフローズン・フォームということも知られている。しか

し、どのようにして両フォームを手話の語が行き来するのかについては未知であり、ASL 等の手話の大言語でも Kegl and Schley (1986) や Tommaso (2004) などを除くと研究が殆どないことが分かった。また手話の語から CL への先祖返りは Backformation (逆成) とよばれている (Sandler & Lillo-Martin 2006, p.96)。

### 3.3 理論的検討その3 : 位置関係の示され方

同じような手話が用いられていても、位置関係の提示にあたっては、CL が必須と分かった。

- (4)  
\*/山//木/ (山裾位置)  
/山/ 非利き手 CL PT<sub>3</sub> (山裾位置) /木/ CL-1 (山裾位置)

つまり/木/が直接、山裾位置に直接来ることではできず、CL 提示が間に挟まると共に、/木/ではなく、木を示す CL が立つことで、山と木の間の位置関係が特定されることが分かった。

## 4. 結論

本稿の冒頭で述べた/山//木/問題については、日本手話では、ツイートで提案されていた句あるいは文の構成は適切ではなく、位置関係を示すためには、CL による再度の置き換えと提示が必須であり、位置関係は手話の語そのものでは示すことができず、位置関係を示すためには CL が必須であることが分かった。同時に手話の語は CL に先行しなければならないことも明らかとなった。

すなわち、

- ① CL は初出では手話の語に先行しない。
- ② 位置関係などは CL によって提示されないとならない。
- ③ 位置に関わる指差し語ではなく、CL に対してなされないとないことが分かった。

## 謝辞

本稿の作成にあたっては、言語学に関心を持つろう者の勉強会での議論が役立った。特に日本手話ネイティブである林雅臣氏と黒田栄光氏には、日本手話のデータの提供でお世話になった。記して感謝したい。

## 参考文献

- 市田泰弘 (2005) 「手話文法研究室手話言語学用語集」  
<http://slling.net/rcsourcgs/glossary.htm>
- Kegl, Judy and Schley, Sara (1986) When is a Classifier No Longer a Classifier?, *Proceedings of the Twelfth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society* (1986), pp. 425-441.
- Sandler, Wendy & Lillo-Martin, Diane, *Sign language and linguistic universals*. Cambridge: Cambridge University Press, 2006
- Russo, Tommaso (2004) Iconicity and Productivity in Sign Language Discourse: An Analysis of Three LIS Discourse Registers, *Sign Language Studies Vol. 4, No. 2* (Winter 2004), pp. 164-197.

## 日本手話学会 役員

---

会長	末森 明夫	(産業技術総合研究所)
副会長	斉藤 くるみ	(日本社会事業大学)
理事	井上 正之	(筑波技術大学)
理事	川口 聖	(国立民族学博物館)
理事	原 大介	(豊田工業大学)
理事	堀内 靖雄	(千葉大学)
監事	山岸 千華	(江戸川ろう者協会)

---

## 第 46 回日本手話学会大会予稿集

2020 年 11 月 23 日発行

ISSN: 1884-3212

発行者 日本手話学会 会長 末森 明夫

事務局 〒600-8815 京都市下京区中堂寺粟田町 93

京都リサーチパーク 6 号館 3 階 (有) セクレタリアット内

<http://jasl.jp/modules/pico/>